The Japan Lung Cancer Society

W-22 臨床病期別にみた肺癌患者の発見動機別予後の検討

熊本市民病院呼吸器科[1]、同　外科[2].
○田中不二穂[1]、福田浩一郎[1]、岳中耐夫[1]、杉本峯晴[1]、志摩　清[1]、馬場憲一郎[2].

【目的】肺癌の発見動機別予後と、その相違に関与する因子について検討する。
【対象】1987年から1991年の間に熊本市民病院呼吸器科に入院した肺癌患者225例。
【方法】肺癌患者を発見動機別に検診発見群（50例）、症状発見群（138例）、および他疾患治療中発見群（37例）に分け、それぞれの予後の相違をKaplan-Meier法による生存曲線と、Logrank検定による生存率の有意差検定を行うことにより検討した。更に、3群の予後の相違に関与していると考えられる因子について検討した。
【結果】検診発見群、および他疾患治療中発見群は臨床病期が早く、症状発見群より予後良好な結果であった。更に、臨床病期別に検討しても同様に予後良好な結果であったため、その理由について臨床病期Ⅰ期を主体に腫瘍径、および病理所見（組織型、分化度、病理病期）などの比較検討を行った結果、検診発見群は組織の分化度が高い傾向にあり、また症状発見群では臨床病期が病理病期より早期と誤判断されている傾向にあった。
【結語】検診発見肺癌は症状発見群に比較し予後良好な生物学的特性を持つことが示唆された。

W-23 予後調査よりみた肺癌X線検診の効果

長崎大学第2内科[1]、長崎県総合保健センター[2]、放射線影響研究所[3]
○早田　宏[1]、岡　三喜男[1]、渡辺正実[1]、富田弘志[2]、早田みどり[3]、原　耕平[1]

【目的】胸部X線検診の効果を評価するために、検診受診者中の全肺癌の5年生存率（5生率）を、性・組織型別に検討した。　【対象・方法】対象は、1987－88年度の地域住民検診を受診した40歳以上の男女であり、X線検診は年1回の間接撮影で二重読影と比較読影を行なった。検診を受診しながらも、1年以内に検診外で発見された症例の把握および予後は、癌登録との照合によって得た。　【結果】受診者205,401人中、検診発見肺癌は 140例、検診外発見肺癌は59例であった。全肺癌 199例の5生率は35％（検診群43％、検診外群17％）で、男性肺癌の5生率は29％、女性肺癌は51％であった。性・組織型別の5生率は、女性腺癌62％、男性腺癌39％、男性扁平上皮癌23％、男性小細胞癌5％であった。検診発見切除Ⅰ期腺癌の5生率は男性78％、女性98％であった。　【結論】胸部X線検診の効果には性差があり、男性が劣っていた。その原因は、男性では発育の早い小細胞癌、扁平上皮癌が多いこと、同じ腺癌でも男性ではより悪性度が高いことが考えられた。男性では、検診のみならず禁煙活動を積極的に勧めるべきである。

【文献】1) Soda H, et al. Cancer 72:2341-6,1993
2) Smart CR. Cancer 72:2295-8,1993

W-24 ヘリカルＣＴの肺癌２次検診への応用 －要精検例の検討－

宍粟郡民病院放射線科[1]、神戸大学放射線科[2]、国立姫路病院放射線科[3]
○本山　新[1]、楠本昌彦[2]、大野良治[2]、中村　徹[2]、遠藤正浩[2]、木村和彦[2]、三村文利[2]、糸氏英一郎[2]、足立秀治[3]、河野通雄[2]

【目的】ヘリカルＣＴを用いた肺癌２次検診における要精検例の検討。【対象】肺癌１次検診（のべ30、104名）で精密検査を必要とされた者269 名【方法】Ｘ線ビーム幅10mm、寝台移動速度15mm/1.5秒で30秒間の呼吸停止下に全肺スキャンを行った。画像再構成は10mm毎に行い、肺野条件と縦隔条件を表示した。【結果】(1)269名中、肺癌11例（扁平上皮癌６例、腺癌２例、小細胞癌１例、転移性癌２例）、経過観察中のもの（腫瘍の可能性あり）20例、その他238 例であった。(2) 経過観察中の20例の内訳は、1)生検で悪性細胞陰性例が２例、2)炎症性疾患が疑われるが、念のため経過観察のものが５例、3)径１cm以下で、生検困難なものが13例であった。いずれも径３cm以下の陰影であった。現在６ヵ月から２年の期間、ヘリカルCTにて経過観察中であるが、増大傾向のあるものは見られていない。【まとめ】ヘリカルCTは、小結節影の描出に優れており、肺癌の検出に有用であった。さらに肺癌の可能性のある病変の詳細な経過観察にも有用であった。

NII-Electronic Library Service